

『彼女の幸運』



うちのトイプードルが、次第に視力を失っていったのは今年に入ってからであった。

八年前、友人から知り合いのブリーダーを紹介してもらったところ、

「うちでいちばん美人が、もうじき出産するのでそれを譲ってもいい」

とのこと。私は保護団体から可哀想なコをひき取ろうかと考えていたのだが、なんとはなしにそちらの方向に流れていったのである。

はたしてうちにやってきた小犬は、目がつぶらで本当にかわいい。散歩に連れ出すと、

「こんなに完璧な顔のトイを見たことがない、どこで手に入れたのか？」

と聞かれるほどであった。が、夜道を怖がったり、やたらものにぶつかるようになり、医者に連れていったところ、遺伝性の目の障害だという。美しいコをつくるために、近親婚を重ねた結果に違いない。

ところが、彼女（メスです）の視力が弱まるのと反比例して、夫の愛情が深まった。散歩にも連れ出し、夜も一緒に眠る。

床にもものを置こうものなら、

「マリー（犬の名）にぶつかったらどうする！」

と私や子どもが怒鳴られる始末だ。

「可哀想で可哀想でたまらない」

と思うといとおしさがつのるようだ。今ではなめるように可愛がっている。

視力が衰えたのは不幸であるが、これだけ愛をそそぐ飼主にめぐりあえたのは、彼女の幸運であったろう。ペットはとにかく愛して愛して大事にする。

それは飼主の最低限の義務だと思う。



作家

林 真理子

林
真
理
子